

## ◆あなたに語る・時代を超えて生きる心◆

とくべつ きかく きょしやう せいはいくせき てんじ  
 特別企画「中国近代絵画の巨匠 齊白石」に展示されている作品について勉強してみよう。

きょしやう  
 巨匠の努力の跡  
 せいはいくせき がこう  
 — 齊白石の画稿について —

20世紀の中国の水墨画を代表する齊白石（1864～1957）は、同時代の日本でいえば、壮大な景観の日本画を描いて画壇の中心にいた横山大観に、小さな生きものを油彩などで緻密に描いて独自の美学を貫いた熊谷守一をあわせたような画家でありました。現在の中華人民共和国になって、政府から「人民芸術家」の称号が贈られ、誰もが知る巨匠となりましたが、本人はもっぱらエビやニワトリを好んで描き、素朴で味わいのある画風を深めていきました。

晩年の齊白石が名誉院長をつとめた北京画院には、白石の水墨画はもちろん、さまざまな資料が残っています。今回、展覧会にあわせてご紹介する

のは、巨匠の努力のあとがうかがえる画稿、すなわち画の下描きやスケッチの類です。

はじめに「綿花図」（図1）（前期展示）を見てみましょう。実際に綿の花を観察し、墨の線でざらりとスケッチされています。その上手さは言うまでもありませんが、いくつか墨の文字が書き込まれていることに注意してください。左側に大きく書かれた「綿花夏秋開也」は「綿の花は夏から秋にかけて開く」。綿という植物の生態を記しています。右上の「花卉之裏有文」は「花びらの裏には筋がある」。中央下の「未開綿之殼似桃子」は「まだ開いていない綿の殻は桃の種に似ている」。綿を観察したときにその特徴を細かく記録していますが、「桃の種に似ている」と書いたのは普段からよく桃を食べていたからなのでしょう。

桃のつながりと言えば、「小猴捧桃図」（図2）（後期展示）は、中国の伝説で有名な孫悟空が桃を手をしている図像です。女性の仙人である西王母が営む花園から三千年に一度、実をつける聖なる桃を盗んで食べてしまい、天界から追放されるという物語をもとにしています。

この図では、はじめに鉛筆などで下絵をつくり、それから墨の線でかたちを決めていきます。孫悟空が右手を額に当てているのは、桃を盗むときに辺りをうかがっているからでしょう。悟空の後めたい気持ちと緊張感が伝わってきます。もともと左手は伸ばして桃を持っていましたが、懐に抱え込むように描き直されています。左手の先には「此手不要」、つまり「この手は不要」、そして懐の桃は「大桃」と書き込まれ、図像が決定



図1 綿花図(画稿) 齊白石筆 中国・北京画院蔵



図2 小猴捧桃図(画稿) 齊白石筆 中国・北京画院蔵



図3 偷桃図 齊白石筆 1940年ごろ 個人蔵

したことを示しています。こうして出来上がったのが「偷桃図」(1940年ごろ、個人蔵)(図3)(今回は展示されませんが、ほぼ下描きのとおりです。このときの白石は80歳ごろなので、老年になっても努力を惜しまないその創作意欲にはおどろくばかりです。

最後に見る「模八大山人小鴨図」(図4)(前期展示)は、古い名画の模写です。中国の画家は古くから名画とされている作品を手本に何度も真似して描いて力を蓄えていきました。中華民国24年(1935)、白石が満71歳のときに描かれたこの鴨の図も簡単なものですが、図の上部を埋め尽くす文字は彼の切実な気持ちが表われています。その意味は次のとおりです。

「私は41歳のころ江西省の省都の南昌に滞在しており、ある旧家で明時代末期の画家・八大山人(1626～1705)の真作である小さな鴨の図を見て模写した。北京に滞在していた75歳[実年齢とは違います]のある日、突然それを無くしてしまった。傷心のあまりこの紙を取り出し、記憶に頼って写してみたところ、ある程度似たものができたので、これを留めておく」と。

齊白石がいかに八大山人という画家を尊敬していたかがわかります。画稿は下描きであるため、完成作ではうかがい知ることができない画家の本音がぼろりと出てくるのもおもしろいところだと言えるでしょう。



図4 模八大山人小鴨図 齊白石筆 中国・北京画院蔵

(列品管理室 呉孟晋)